

『ずっと心に引っかかっていた』

ひじり在宅クリニック 院長 岡本 拓也



ずっと心に引っかかっていた。

もっと他にやりようはなかったか？最後までYさんがYさんのままYさんらしくいることができる方法は、他になかったか？家族は後悔していないだろうか？Yさんが亡くなった後も考えていた。

自宅にいたYさんが苦痛に思っていたこと。それは、終末期のがん患者である自分の世話をしてくれている同居の娘に多大な迷惑をかけていること。何よりもそのことを、Yさんは苦痛に感じていた。

娘は快く世話をしていた。苦勞がないと言えば嘘になるけれど、娘は迷惑な素振りなどみじんも見せなかったし、そんなことは思ってもいなかった。

Yさんが自宅療養中にはこんなこともあった。介護をしていた娘自身が急性虫垂炎で救急搬送され緊急手術を受けることになった。さすがにYさんは入院するしかないだろう、と私は思った。しかし、そんな状況の中ですら、娘は父親の家に居たい思いを叶えてあげたい一心で、近くに住んでいる姉に仕事を休んでもらって父親の世話を頼み、父親を入院させずにこの急場をしのいだ。

娘は、退院した後も、病み上がりの身体で一生懸命に父親の世話をした。私は娘の身体を案じたが、娘は、私は大丈夫ですと軽やかに笑った。娘にとって父親は本当に大切な存在であることは、傍で見ている私にも強く感じられた。娘はただただ父親の願う通りにしてあげたかった。

娘が心を痛めたのは、娘への申し訳なさや苦しむ父親の姿に対してだった。お互いがお互いを思いやり合って、その結果、お互いに辛さを感じていた。娘に申し訳なく思う父。申し訳なく思う父を見て心を痛める娘。

家は、Yさんが一番自分らしく居られる場所だった。本当は家に居続けたかった。しかし、娘に負担をかける父親であるのは嫌だった。「お父さん、私はそんな風に思っていないよ。私は大丈夫だよ」と娘が言っても、そんなはずはないとも言うかのようにYさんは沈黙し、首を横に振った。

ある日の訪問診療の際、Yさんは振り絞るように言った。「先生、決

心しました。入院させて下さい。これ以上娘に迷惑は掛けられません。Yさんは男泣きし、娘の目にも涙がこぼれた。さすがにこれ以上はと思いき、不本意だったかもしれないけれど娘の承諾も得て、直ちに入院できるように手配した。

入院したYさんに会いに行った。まだ何日も経っていないのに、Yさんはすっかり変わり果てていた。高齢の患者さんが入院してせん妄と呼ばれる状態に陥ることはよくある。Yさんも例外ではなかった。ほんの数日前、娘を案じる父親としての人間らしい涙を流していたYさんとのあまりの落差に心が痛んだが、そんな私の比ではなく、娘は父親のこの姿を見て辛い思いをしているはずだった。間もなく、YさんはYさんに戻ることなく病院で人生を終えた。Yさんが入院してから、私が娘に会うことはなかった。娘は入院させたことを後悔していないだろうか、入院に踏み切る最終判断をした私を恨んでいないだろうか、気になった。

何か月か経った後に、ご自宅に電話してみた。2度ほど試みたが、Yさんの家にかけたその電話に誰かが出ることはなかった。私自身の申し訳なさもあり、娘の声を聴くのがこわい気持ちもあったのかもしれない、私が3度目の電話をかけることはなかった。

そのまま1年近くの時が過ぎ、思いがけない場所で、娘の娘、つまりYさんの孫娘に当たる人に偶然会った。先生、あの時はお世話になりました、と声を掛けてくれたけれど、一度しか会っていない私は彼女が誰かわからず、Yの孫です、と言われて初めて、ああ、Yさんの…と脳の回路がようやくつながって返事をした。孫娘の話を聴く中でわかったこと。確かに入院してからのYさんはすっかり人が変わってしまい、それは家族にとってすごく悲しいことだったけれど、それでも家で過ごすことができたあの時間があったから本当に良かった、あの時間があったことが救いだったと、孫娘も、その母、つまり私が気にしていたYさんの娘も、そう思ってくれていること。まだ若い孫娘の涙をためた優しい眼差しと言葉が心にしみた。